

# 英語の呼びかけ語の談話標識的用法 (2)

The discourse marker use of english address terms (2)

松尾 文子\*

Fumiko Matsuo

キーワード：呼びかけ語、談話標識、談話機能

Key words : address terms, discourse markers, discourse functions

## 要旨

本稿は、英語の呼びかけ語の談話標識的用法を考察する論文の第二部である。第一部では、基本的論考として英語の呼びかけ語と談話標識に関する先行研究を紹介し、さらに後編において検討すべき問題を指摘した。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章では呼びかけ語の機能の展開を述べ、ここで挙げた4つの機能を、次章以下で例を挙げて順次詳述する。第3章では、J. Grishamの*The Firm*から呼びかけ語が多用されている会話を引用し、それぞれの機能を説明する。第4章では、重要な情報・主張点が後続する合図となる機能を持つ例を挙げる。第5章と第6章では、会話の展開の方向性を示す機能を扱う。まず、第5章ではターン・マネージメントの機能を、第6章ではトピック・マネージメントの機能を担う例を示す。第7章では発話の力の調整する機能を、第8章では対人関係を調整する機能を持つ例を示す。最後に、第9章では呼びかけ語の機能の展開と特徴をまとめる。

本稿の続編では、ここで明らかになった呼びかけ語の機能をもとに、呼びかけ語とその機能と類似した機能を持つ談話標識との共通点や相違点、呼びかけ語と談話標識が共起する場合の両者の機能の棲み分けやコミュニケーション上の効果などを論じる予定である。

## Abstract

This is the second paper on the use of English address terms used for discourse markers. In the first paper, I introduced previous studies on English address terms and discourse markers, and I indicated some points to be considered.

The sequel to the first paper is structured as follows. Four functions of address terms will be shown in section 2. In section 3, I will quote a conversation from *The Firm* written by J. Grisham, where nineteen address terms are used, and I will illustrate their functions. In section 4, I will focus on address terms which function to convey the important information. The next two sections will deal with conversational management functions. The functions of turn-management and topic-management will be explained in section 5 and 6 respectively. I will examine illocutionary force management functions in section 7 and interpersonal management functions in section 8. Finally, the functions and characteristics of address terms will be summarized in section 9.

In the third paper, I will discuss the following points: the functional similarities and differences between address terms and discourse markers, and the communicative effects of co-occurrence of address terms and discourse markers.

---

\* 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

## 1. はじめに

本稿は、前号で発表した英語の呼びかけ語の談話標識的用法を考察する論文の続編である。前編では、以下の事柄を考察した。まず、呼びかけ語と談話標識に関する過去の論考をそれぞれ紹介した。続いて、实例を挙げて呼びかけ語の談話標識的機能を考察するための論点を記した。さらに、呼びかけ語と談話標識が用いられる位置と両者の機能について、ターン構成単位(TCU)と文における位置の観点から例を挙げて論じた。最後に、これらのことをとおして見えてきた論点を整理した。

本稿では前編執筆以降に集めた例も加えて、呼びかけ語の機能をより詳細に述べ、それらの機能がどこから生じるのかを論じる。なお、前編では文とTCUという用語を用いたが、文を発話、TCUをターンの表記に改める。「発話」は特定の話し手が特定の状況で何らかの意図をもって発したことばで、実際の談話の場面で用いられた「文」(語や句、不完全な形の文の場合もある)であると言える。呼びかけ語はほとんどが話し言葉で用いられることから、「発話」と表記する。

本稿の続編となる(3)では、本編をもとに談話標識と比較して呼びかけ語の談話標識的機能と、呼びかけ語と談話標識が共起する場合の呼びかけ語の機能やコミュニケーション上の効果を論じる予定である。

## II. 呼びかけ語の機能の展開

日本語と比べて英語では呼びかけ語が用いられることが多く、呼びかけ語として用いられる語彙項目もかなり異なっており(注1)、機能も異なる。井上(2003: 24)<sup>1)</sup>によると、「日本語では呼称の大部分は呼びかけの要素を伴うが、英語では対話者がすでに特定されている状態で用いられることが多い」。これらのことから、日本語の呼びかけ語と比べて、英語の呼びかけ語は幅広い談話的な役割を有するこ

とが分かる。

また、呼びかけ語の機能に関して、Zwicky(1974)<sup>2)</sup>の提唱以降基本となっている、聞き手の注意を引くcallと、話し手と聞き手の関係を維持したり強化したりするaddressがあるが、より複雑な談話機能が見られる。では、英語の呼びかけ語はどのような機能を担うのだろうか。

呼びかけ語の基本的な機能は、文字通り相手に呼びかけることである。呼びかけることによって相手に注意喚起し、何らかの働きかけをする。話し手は意図的な談話戦略をもって、働きかけが必要な節目で呼びかけ語を用いる。呼びかけ語はすぐれてコミュニケーション的な要素である。

相手に注意喚起して働きかけを必要とする要因は何であろうか。4つのタイプを挙げる。

- ① 重要な情報や主張点が後続することを合図する必要がある：呼びかけ語を用いて、そこで会話の流れを止めることで、相手に注意喚起して後続部に注目させる。
- ② 会話の展開の方向性を示す必要がある。
  - (1)ターン・マネージメント：呼びかけ語を用いることで、発言権を獲得したり譲渡したりする。
  - (2)トピック・マネージメント：呼びかけ語を用いることで、話題の転換や本題の導入など、話題に何らかの変化があることを合図をする。
- ③ 発話の力を調整する必要がある：当該の発話が終了したところ(すなわち、発話末)で、命令や主張といった発話の力を強めたり弱めたりする。発話行為に関わる。発話の力を強めるか弱めるかに関しては、用いられる場面(文脈)が関わる。また、呼びかけ語自体の語彙的要因が発話の力の調整に結び付くことがある。

- ④ 対人関係を調整する必要がある：多くの場合、相手にとって好ましくない内容を伝えたり、相手にとって負担になったり不利なことを強いる場合に、呼びかけ語を用いることで相手との関係を損ねないようにする。この場合も、呼びかけ語自体の語彙的要因が関わることがある。また、呼びかけ語を用いることで、相手との距離を置く場合もある。

これらが呼びかけ語の機能となるが、一つの呼びかけ語が複数の機能をもつこともある。これに関しては、後に例を挙げて説明する。

以下、実例を挙げて呼びかけ語の機能を説明する。呼びかけ語の機能と呼びかけ語が用いられる位置には強い関係が見られるので、位置の情報も併せて記す。具体的には、一つの発話の発話頭・中・末のどこで用いられるか、また必要な場合には、一人の話し手が一回の順番で発するいくつかの発話の集まりであるターン (turn) のターン頭・途中・末のどこで用いられるかを記す。ターンは一つの発話で構成される場合も、複数の発話で構成される場合もある。

### III. *The Firm*からの実例

ここでは、二人の会話で呼びかけ語が頻繁に用いられている例を挙げて、それぞれの呼びかけ語の機能を説明する。

次例は、弁護士のミッチとFBI捜査官のウェイン・タランスの電話での会話である。ミッチは勤務する法律事務所を背後で操る組織に気づき、組織の一味に追われる身となる。タランスからヒューゴ判事という名前で電話があったら、ミッチはすぐにその場から逃げることになっていた。FBI長官のヴォイルズからタランスに、危険が迫っているミッチを保護するように指示が出た。そのことをミッチに知らせようと、タランスはヒューゴ判事の名で電話をかけてきた。電話を受けたミッチはその時にいた法

律事務所を出て、あるホテルの公衆電話から連邦捜査局メンフィス支局に電話をかけてタランスを呼び出す。説明の便宜上、呼びかけ語には①～⑱の番号を付している。

- (1) “Wayne Tarrance, please. It's an emergency. This is Mitch McDeere.” Tarrance was on the phone in seconds. “① *Mitch*, where are you?” “Okay, ② *Tarance*, what's going on?” “Where are you?” “I'm out of the building, ③ *Judge Hugo*. I'm safe for now. What's happened?” “④ *Mitch*, you've gotta come in.” “I don't have to do a damned thing, ⑤ *Tarrance*. And I won't, until you talk to me.” “Well, we've, uh, we've had a slight problem. There's been a small leak. You need—” “Leak, ⑥ *Tarrance*? There's no such thing as a small leak. Talk to me, ⑦ *Tarrance*, before I hang up this phone and disappear. You're tracing this call, aren't you, ⑧ *Tarrance*? I'm hanging up.” “No! Listen, ⑨ *Mitch*. They know we've been talking, and they know about the money and the files.” There was a long pause. “A small leak, ⑩ *Tarrance*. Sounds like the dam burst. Tell me about this leak, and quick.” “God this hurts. ⑪ *Mitch*, I want you to know how much this hurts. Voyles is devastated. One of our senior men sold the information. We caught him this morning at a hotel in Washington. They paid him two hundred thousand for the story on you. We're in shock, ⑫ *Mitch*.” “Oh, I'm touched. I'm truly concerned over your shock and pain, ⑬ *Tarrance*. I guess now you want me to run down there to your office so we can all sit around and console each other.” “Voyles will be there by noon, ⑭ *Mitch*. He's flying in with his top people. He wants to meet with you. We'll get you out of town.” “Right. You want me to rush into your arms for protection. You're an idiot, ⑮ *Tarrance*. Voyles is an idiot. You're all

idiots. And I'm a fool for trusting you. Are you tracing this call, ⑩ *Tarrance*?” “No!” “You're lying. I'm hanging up, ⑪ *Tarrance*. Sit tight and I'll call you in thirty minutes from another phone.” “No! ⑫ *Mitch*, listen. You're dead if you don't come in.” “Goodbye, ⑬ *Wayne*. Sit by the phone.”—Grisham, *Firm* (「ウェイン・タランスをたのむ。緊急事態だ。こちらはミッチ・マクディアー。」 タランスは数秒で電話口に出てきた。「① ミッチ、どこにいる?」「で、② タランス、何事だ?」「どこにいるんだ?」「(さっきまでいた) ビルからは出たよ、③ ヒューゴ判事。今のところは安全だ。何があったんだ?」「④ ミッチ、戻って来い。」「そうする必要なんかないね、⑤ タランス。何があったのか話してくれるまでは、そうするつもりなんてさらさらない。」「そのう、こっちで、えー、ちょっとした問題が起こった。些細な情報漏洩があったんだ。きみは—」「漏洩だって、⑥ タランス? 情報の漏洩に、些細なものなんてないだろ。話すんだ、⑦ タランス、それも僕が電話を切って姿を消す前にな。この電話を逆探知してるんだろ、⑧ タランス? 切るぞ。」「待て! 聞いてくれ、⑨ ミッチ。奴らは我々が話をしてきたことも、例の金やファイルのことも知ってるんだ。」長い間があった。「些細な情報の漏洩って言ったよな、⑩ タランス。ダムの決壊のように思えるがね。問題の漏洩について話してくれ、今すぐに。」「大打撃だよ。⑪ ミッチ、どれだけの打撃か、きみに分かって欲しい。ヴォイルズ長官は大変なショックを受けてる。我々の上層部の一人が情報を売ってたんだ。今朝ワシントンのホテルでその男を捕まえた。奴らは、きみについての情報を得るために、その男に20万ドル払ってたんだ。我々はショックを受けてるんだよ、⑫ ミッチ。」「ああ、僕もそうさ。あんたたちのショックと苦悩には心から同情するよ、⑬ タランス。それで、皆で座って互いに慰めあえるように、僕にすぐそっちのオフ

イスに来てほしいということなんだ。」「ヴォイルズ長官は、昼までにはこちらに到着する、⑭ ミッチ。幹部たちと一緒に、飛行機でこっちに向かっている。長官はきみに会いたがっている。我々は、きみをこの街から連れ出すつもりだ。」「そうかい。僕に保護を求めてあんたたちの胸に飛び込んでほしいってわけか。あんたは大バカ者だ、⑮ タランス。ヴォイルズも大バカ者だ。あんたたち全員、大バカ者だ。そんなあんたたちを信じたなんて、僕も愚か者だよ。この電話を逆探知してるのか、⑯ タランス?」「そんなことあるもんか!」「嘘だね。もう切るぞ、⑰ タランス。じっとそこに座ってろ。そうすれば、あと30分したら別の場所の電話で連絡するよ。」「待て! ⑱ ミッチ、聞いてくれ。こっちに来ないと、きみは死ぬんだぞ!」「あばよ、⑲ ウェインさん。電話のそばに座ってるんだな。)」

- ① 発話頭・ターン頭。電話に出て最初に呼びかけ語を用いることで、発言権を獲得している。
- ② 発話頭・ターン頭。質問—返答の隣接応答ペアのルールからすると、「どこにいるのか」という問いに答えるべきであるが、呼びかけ語を用いることで話題を転換して会話の流れを変えようとしている(注2)。先行発話を受けただうえで話題を転換する合図となるokayと共に起している。
- ③ 発話末。「ヒューゴ判事の名で電話があったらその場から逃れろという命令通りになりましたよ」という主張の力を強めている。この箇所だけ、呼びかけ語がタランスからヒューゴ判事となっている。
- ④ 発話頭・ターン頭。②同様、「何が起っているのか」という問いに答えず、呼びかけ語を用いることで話題を転換して会話の流れを変えようとしている。
- ⑤ 発話末。呼びかけ語を用いることで、命令に従う必要などないという主張の力を強めている。

- ⑥ 発話末(一語文)・ターン頭。呼びかけ語を用いることで、相手の発話を遮って発言権を獲得している。当該の発話は“Leak?”の一語文で、呼びかけ語は発話頭に近い位置で用いられており、それによって発言権の獲得が保証されている。さらに、「漏洩だと言うのか」(=You say“leak”?)と、相手の発言に対する反論の力を強めている。
- ⑦ 発話中。呼びかけ語は主節と従属節の間で用いられている。呼びかけ語によって主節の「話せ」の命令の力を強め、かつ、従属節の前で用いることで相手に注意喚起して、後続部「電話を切って姿を消す前に」に注目させている。
- ⑧ 発話末。呼びかけ語が確認を求める付加疑問文と共に起して、「逆探知してるに違いない」と相手に同意を求める力を強めている。
- ⑨ 発話末(一語文)。呼びかけ語を用いることで、命令の力を強めている。
- ⑩ 発話末・ターン頭。沈黙が続いた後、前に出てきた情報(些細な情報の漏洩[本文では下線を引いている])を再び持ち出して、その話題を再導入している。当該の発話は“A small leak”と短く、呼びかけ語は発話頭に近い位置で用いられている。呼びかけ語によって再導入された話題が会話の流れに埋もれることなく前面に出る。
- ⑪ 発話頭・ターン途中。ターンの途中で呼びかけ語を用いることで、相手に注意喚起して、後続部で先行部の「大打撃だ」の内容を強調する情報を述べている。
- ⑫ 発話末・ターン末。呼びかけ語を用いることで、「ショックを受けている」という主張の力を強め、かつ、呼びかけ語をターン末で用いることで相手に発言権を譲渡している。
- ⑬ 発話末。呼びかけ語を用いることで、「相手に同情している」という主張の力を強めている。
- ⑭ 発話末。呼びかけ語を用いることで、相手に「長官が昼までに到着するんだ」という主張の力を強めて、それによって「すぐに戻って来る」ように説得している。
- ⑮ 発話末・ターン途中。呼びかけ語を用いることで、「あんたたちは大バカ者だ」という主張の力を強めている。後続部分でも同じ“idiot”という語が二度、さらに類義語のfoolが用いられている。
- ⑯ 発話末・ターン末。呼びかけ語を用いることで、発言権を譲渡している。質問—返答の隣接応答ペアによって、相手に発言権を譲渡できる。さらに、先行部(⑧の前)で、“You’re tracing this call, aren’t you”と述べていて、それを再び持ち出して相手を問い詰める力が、呼びかけ語によって強められている。
- ⑰ 発話末。呼びかけ語を用いることで「電話を切るぞ」という主張の力を強めている。先行部分(⑧と⑨の間)でも同じことばが発せられているが、呼びかけ語を伴う⑰の方が話し手の強い意志が感じられる。
- ⑱ 発話頭。呼びかけ語は“No!”に続いて用いられており、事実上ターン頭と考えられる。相手が電話を切ってしまうようなので焦って呼びかけ語を用いて、発言権を獲得している。⑨でも類似の表現が用いられているが、⑨では“No! Listen, *Mitch*.”と呼びかけ語が後ろに来ている。一方、⑱では“No! *Mitch*, listen.”と呼びかけ語が先に来ている。⑱の方が、とりあえず相手の注意を引きとめようとする話し手の焦りが感じられる。呼びかけ語の本来の機能が強く反映されている。
- ⑲ 発話末。“Goodbye+呼びかけ語”という定型表現で、一連の会話を終結させる際にしばしば用いられる。ここでは、呼び方がそれまでのファーストネーム(Tarrance)から姓(Wayne)に変わり、相手と距離

を置いて突き放しているニュアンスがある。滝浦 (2016: 91)<sup>3)</sup> の言うように、言語全般において、呼称は、人間関係の状態とそこからの変移をともに敏感に表す装置である。

このように、そう長くはない会話で19の呼びかけ語が用いられ、しかもそれらは単に相手に呼びかけること以上の談話上の機能を担っていることが分かる。

次節から、前節で挙げた機能を説明するために、*The Firm* の例に加えて別の例を挙げていく。

#### IV. 重要な情報・主張点が後続する合図

ここでは、呼びかけ語を用いてそこで会話の流れを止めることで、相手に注意喚起し後続部に注目させて、重要な情報や主張を述べる例を挙げる。

次例はセルン（欧州原子核研究機構）所長のコーラーとヴィットリアの会話である。殺されたのは、セルンの科学者でヴィットリアの父である。

(2) “Where is his body?” she demanded. “Being attended to.” The white lie surprised Langdon. “I want to see him,” Vittoria said. “Vittoria,” Kohler urged, “your father was brutally murdered. You would be better to remember him as he was.” “You haven't told the staff my father was *murdered*?” Her mystified tone was now laced with anger. Kohler's tone hardened instantly. “Perhaps you forget, *Ms. Vetra*, as soon as I report your father's murder, there will be an investigation of CERN. …” —Brown, *Angels* (「父の遺体はどこですか？」彼女（ヴィットリア）は詰問した。「処置を受けているところだ。」悪意のない嘘にラングドンは驚いた。「合わせてください。」ヴィットリアは言った。

「ヴィットリア」コーラーは強い口調で言った。「父上は無残な殺され方をした。生前の姿を記憶に留めておく方がいい。」…「父が殺されたことを職員に話していないの？」当惑した声には、いまや怒りがにじんでいる。コーラーの口調がとたんに非情になった。「忘れていたようだが、ミズ・ヴェトラ、父上が殺されたと公表すれば、セルンに捜査の手が入る。…」

一つ目の呼びかけ語は発話頭・ターン頭で用いられ、発言権を獲得し、かつ、「これから言うことをよく聞くんだ」というニュアンスで注意喚起して、重要な情報を導入している。二つ目の呼びかけ語は発話中で用いられ、呼びかけ語を介して重要な情報を導入している。呼び方がVittoriaからMs. Vetraと変わっているところに、相手に対する親しみの感情を減じて距離を置くという話し手の態度が表れている。

次例は、ある会社の上席副社長兼法務主任と弁護士ジンクの電話での会話である。上席副社長は現在関わっている訴訟を避けたいという。

(3) “We'd like to get together, *Mr. Zinc*, face-to-face.” —Grisham, *Litigators* (「我々は集まって話し合いたいんだが、ミスター・ジンク、直接顔を合わせてね。」)

呼びかけ語は発話中で用いられ、呼びかけ語を介して、前述の内容 (get together) により強い表現 (face-to-face) を添えている。

*The Firm* の⑪のように、呼びかけ語が発話頭で用いられることもあるが、上例のように発話中で用いられることが多く、相手を後続する部分に注目させて重要な情報や伝えたい情報が導入される。

#### V. ターン・マネージメント

ここでは、会話の展開の方向性を示す機能

のうち、ターン・マネージメントに関わるものを取り上げる。その中で、発言権の獲得がよく分かる例を挙げる。

テレビキャスターのダナ・エバンスは、ハドソン上院議員の悪事の証拠をつかんだ。それを知った議員は執事のシーザーに彼女を殺すように命じた。

(4) In the limousine, Dana said, “You don't want to do this, *Cesar*. I —” “Shut up, *Miss Evans*.” “*Cesar*, listen to me. You don't know these people. They're murderers. You're a decent man. Don't let Mr. Hudson force you to do things that —” —Sheldon, *Sky* (リムジンの中でダナは言った。「あなたはこんなことしたくはないでしょ、シーザー。私は—」「黙れ、ミス・エバンス!」「シーザー、私の言うことを聴いて。あなたはあの人たちのことを知らないのよ。あの人たちは人殺しなのよ。あなたはまともな人間よ。ハドソン議員の言いなりになっちゃだめ—」)

一つ目の呼びかけ語は発話末で用いられ、「あなたはこんなこと(人を殺す)などしたくないはずだ」と主張の力を強めている。二つ目の呼びかけ語は発話末で用いられ、「黙れ」と命令の力を強めている。三つ目の呼びかけ語がターン・マネージメントの機能を持っている。発話頭・ターン頭で用いられ、「黙れ」と命じられたにもかかわらず、まず相手の名前を呼ぶことで発言権を獲得している。

## VI. トピック・マネージメント

ここでは、会話の展開の方向性を示す機能のうち、トピック・マネージメントに関わるものを取り上げる。その中で、本題に戻る機能を果たす呼びかけ語の例を挙げる。

次例は、弁護士デイヴィッドとバーの店員アブナーのバーでの会話である。

(5) “What's the plan?” David laughed, much too loud. “A plan? Haven't got that far. Two hours ago I reported for work as always; now I'm cracking up.” Another swig. “My plan, *Abner*, is to sit here for a long time and try to analyze my crack-up. Will you help me?” —Grisham, *Litigators* (「その計画って?」デイヴィッドは笑った—それも大きすぎる声で。「計画? そんな段階にはたどり着いてないね。2時間前、ぼくはいつもどおり出勤していた。今はダウンしそうだ。」またビールを一口。「ぼくの計画はね、アブナー、ここにじっくりと腰を据えて、ダウンしかけた自分を分析することさ。力を貸してくれるか?」)

デイヴィッドはアブナーに「計画は?」と聞かれて、すぐには計画の中身を語っていない。「A plan?」で返答を始めるが、話が脱線した後、ビールを一口飲むことでポーズを置いて、「My plan」で発話を再開している。直後に呼びかけ語をさむことで相手に後続する発話に注目するよう注意を促して、話の流れを変えて本題の「計画」の内容を導入することが分かりやすくなる。

## VII. 発話の力の調整

ここでは、呼びかけ語が発話末で用いられて、発話の力を調整する例を挙げる。

次例は法律事務所の同僚の会話である。

(6) “What does David know about litigation?” “What do we know about litigation, *Wally*? …” —Grisham, *Litigators* (「(新入り弁護士の) デイヴィッドが訴訟の何を知ってるというんだ?」「われわれが訴訟の何を知ってるというんだね、ウォリー?…」)

呼びかけ語が発話末で用いられて、相手に対する反論の力を強めている。直前の相手のことばをオウム返式的に用いることで、反駁のニ

ニュアンスが強くなる。

発話の力をどのように調整するか、すなわち強めるのか弱めるのかは、当該の呼びかけ語が用いられる場面(文脈)による。また、前編で述べたように、呼びかけ語は語彙的特徴によって、話し手の発話態度や対人関係を示すことができる。まず、ここまで挙げた例と同様に、発話の力を強める例を見る。次例は、夫婦喧嘩をしている妻が夫に向かって言うことばである。

- (7) “Don't curse at me, *Macon Leary!*”—Tyler, *Tourist* (「私に向かって悪態つかないでよ、メイコン・リアリ!」)

夫婦の間であるにもかかわらず、夫をフルネームで呼ぶことで、相手に有無を言わせないニュアンスと話し手の苛立ちが込められて、命令の力を強めている。

次例は発話の力を弱める例である。ある法律事務所にトリップという男とディアンナという女が押し入ってきた。彼女はトリップと結婚するために現夫との離婚を成立させたいが、そのための報酬は支払いたくない。トリップは即座に離婚を成立させるよう、弁護士を脅迫している。しかし、弁護士が拳銃を手にしたのでおとなしくなってきた。

- (8) Trip was still backing away, with DeAnna practically unseen behind him. “Be cool, *man*,” Trip said, both palms facing Wally.—Grisham, *Litigators* (トリップはなおも後ずさり続け、ディアンナの姿は彼の(巨体の)陰に隠れてほとんど見えなくなった。「落ち着けよ、な。」トリップは両方の手のひらをウォリーに向けて言った。)

トリップは直前まで相手のことを“Talk to me, *Figg*.”などと姓で呼んでいたが、ここではmanに変化している。呼びかけ語のmanは、Biber et al. (1999: 1109)<sup>4)</sup>では親しさを表す

familiarizerとされる。もちろん、文脈によっては話し手が興奮したり怒ったりしたときなどにも用いられるが(*Longman Dictionary of Contemporary English*<sup>6)</sup>)、ここでは呼び方を姓からmanに変えることで、それまで露わにしていた敵対心を抑えて親しさを表して対人関係を調整し、さらに命令の強制力を弱めている。

## VIII. 対人関係の調整

ここでは、呼びかけ語を用いることで対人関係を調整する例を挙げる。次例は、ヴィットリアが上司であるセルン所長のマックスと電話で話す場面である。彼女の父は核の数十倍のエネルギーを持つ反物質を発明したが、そのことを誰に話したかが分かったかもしれないと聞いて、次のように答える。

- (9) Vittoria's expression clouded. “*Max*, my father said he told no one.” “I'm afraid, *Vittoria*, your father *did* tell someone. I need to check some security records. I will be in touch soon.” The line went dead.—Brown, *Angels*(ヴィットリアの表情が曇った。「所長、(反物質の件を)父は誰にも話してないと言ってたわ。」「残念だがヴィットリア、父上が誰かに話したのは間違いない。警備記録を確認する必要がある。またすぐに連絡する。」電話が切れた。)

一つ目の呼びかけ語は発話頭・ターン頭で用いられ、発言権を獲得し、かつ、相手の主張とは異なる後続部の発言に注目させている。二つ目の呼びかけ語は発話中(主節と従属節の間)で用いられ、後続部に相手の注意を向けて主張点を述べている。動詞が*did* tellと強調形になっていることに注意されたい。また、I'm afraidの後でさらに呼びかけ語を用いて一呼吸置くことで、これから好ましくないことを述べるので相手を気遣っていることが示される。

次例は親子の会話である。父親は判事、息

子は弁護士であるが一流の弁護士事務所を辞めて、小さな事務所で働き始めた。キャリアを捨てて怪しげな事務所で働き始めた息子に、父親は不満を感じている。

- (10) “What made you choose them?” David glanced Helen, who looked away with a smile. “That, *Dad*, is a long story that I will not bore you with.”—Grisham, *Litigators*(「何でそんな事務所を選んだのか？」デイヴィッドは妻のヘレンをちらりと見ると、彼女は微笑みながら顔をそむけた。「それがね、父さん、話せば長くなるけど、父さんを退屈させるつもりはないよ。」)

呼びかけ語は発話中で用いられ、相手に注意喚起して後続発話に注目させる。さらに、*Dad* というinformalな呼びかけ語を用いることで、父親がよい顔をするはずのない話をするに関して、父親に対する気遣いを表している。

相手に対する気遣いや親しさを示したり、相手との人間関係を維持する意思があることは、呼びかけ語自体の語彙的特徴によっても明らかになる。(11)は電話での男女の会話、(12)は放送局の同僚同士の会話である。

- (11) “I miss you,” Jeff said. “I miss you, *my dearest*. I have some Christmas presents for you.”—Sheldon, *Sky* (「きみに会えなくて寂しいよ。」とジェフは言った。「私もよ、あなた。あなたにクリスマスプレゼントがあるよ。」)
- (12) When the evening broadcast was finished, Jeff turned to Dana. “You look worried, *honey*?”—Sheldon, *Sky* (夕方の番組が終わると、ジェフはダナの方を向いて言った。「心配そうな顔をしてるな、ダナ。」)

いずれも呼びかけ語を用いることで、相手に対する愛情や親しみを示している。なお、呼びかけ語を用いることで、相手と距離を置くことがあるが、これに関しては(8)を参照されたい。

このように、呼びかけ語は話し手が聞き手に対してどのような態度で臨んでいるかという心的状態を表す表出的な(expressive)性質を持ち、ゆえに語用論的な役割を担っている(注3)。

## IX. おわりに

最後に、呼びかけ語の機能の展開と特徴をまとめる。

呼びかけ語の基本的な機能は、相手に呼びかけることである。呼びかけることによって相手に注意喚起して何らかの働きかけをする。注意喚起して働きかけをする要因が相手じたいならば、呼びかけ語は発言の聞き手を指定する機能を持ち、これが最も原初的な機能である。聞き手が明白な場合は、対象となる要因によって、さまざまな機能が展開する。まず、注意喚起の対象となる要因が発話によって伝えられる情報である場合には、呼びかけ語を用いてそこで会話の流れをいったん止めて、重要な情報が後続することを合図する。会話の展開に注意を促す場合には、呼びかけ語を用いることで、発言権を獲得したり譲渡したりするターン・マネージメントの機能と、話題の転換や本題の導入などの合図をするトピック・マネージメントの機能がある。また、終了した発話の解釈に注目させる場合には、当該の発話の持つ命令や主張などの発話の力の調整をする機能を持つ。さらに、話し手と聞き手の人間関係が対象となる場合には、呼びかけ語は相手との関係を損ねないように対人関係を調整する機能を担うことが多いが、相手との距離を置く場合もある。一つの呼びかけ語が同時に複数の機能を有することもある。

呼びかけ語の機能は、呼びかけ語が用いられる発話やターンでの位置との関係が強い。重要な情報が後続することを合図する場合は、発話の途中で用いられることが多い。*The Firm*の⑪では、ターンの途中の発話頭で呼びかけ語が用いられていて、直前の発話内容を強調

する発話が続けている。会話の展開の方向性を示す機能の中でターン・マネージメントの機能を持つ場合は、ターン頭の発話頭で用いられると発言権の獲得の、ターン末の発話末で用いられると発言権の譲渡の役割を果たす。トピック・マネージメントの機能を持つ場合は、ターン頭の発話頭で用いられて、話題の転換を示すことが多い。また、(5)のようにターンの途中の発話中で用いられて本題を導入することもある。発話の力を調整する場合は、呼びかけ語は発話末で用いられる。対人関係の調整の機能では、多くの場合発話末で用いられるが、(9) (10)のように、発話中で用いられることもある。これは、会話を進めていくうえで話し手の微妙な心理状態を反映して、オンラインで対人関係の調整をしているからである。

呼びかけ語が用いられるターンでの位置に関して、ターン頭はそのターンの発話の内容や会話の流れの手掛かりとなる場所であるので、会話の展開を示す機能を担うのに適切で、呼びかけ語は発言権の獲得や話題の転換の合図となる。一方、ターン末では一連の発話を終了して相手に何らかの反応を促すのに適切な場所で、呼びかけ語は発言権を相手に譲渡する合図となる。

呼びかけ語が用いられる発話での位置に関しては、発話頭は後続する発話の方向付けをするのに適切な場所であるので、発言権を獲得してこれから自分が話すことを示したり、*The Firm*の②と④の質問—応答隣接ペアのように、相手の発話(質問)に反応し、かつ呼びかけ語を用いることで会話の流れを止めて、隣接ペアとして好まれる反応(応答)をせずに話題を転換することがある。発話末は終了した発話に関する調整をする場所で、調整する対象は発話の力や対人関係である(注4)。

本稿の続編では、ここで明らかになった呼びかけ語の機能をもとに、呼びかけ語とこれらの機能と似た機能を持つ談話標識(now, so, look, well, you knowなど)との共通点や相違点、さらに、呼びかけ語と談話標識が共起す

る場合の両者の機能の棲み分けや、コミュニケーション上の効果などを論じる予定である(注5)。

## 注

1. Biber et al. (1999: 1108-1113)<sup>4)</sup> でいう honey, sweet pieのようなendearmentsや、mate, bro.のようなfamiliarizerは、英語ではよく用いられるが、日本語ではほとんど用いられない。

英語の呼びかけ語の辞書である Dunkling (1990: 24-25)<sup>5)</sup> では、男性が女性を侮辱するときyou little goose が用いられたり、労働者階級の話し手が友情の気持ちを表すのにducks, hen, petが用いられることがあるとするが、このような呼びかけ語は、日本語では通例用いられない。

また、八木(1999: 224-225)<sup>6)</sup> では、日本語では呼びかけ語として頻繁に用いられるteacher(先生)は、英語では幼児の言葉か俗語的な文脈で“teach”のような省略形に限り用いられるようだとする。さらに、“Thank you, teacher.”は相手の名前が分からない場合に用いられる可能性があるのに対して、doctorやprofessorにはそのような制約はないとする。

2. Clayman (2013: 293-294)<sup>7)</sup> は、応答の文頭で用いられる呼びかけ語について、問いに対する応答をあからさまに拒否するとき呼びかけ語が用いられることがあるとする。また、先行の問いに対する不同意の表明など、相手にとっては好ましくない応答をするときに呼びかけ語が用いられるとする。

3. Sonnenhauser and Hanna (2013: 14)<sup>8)</sup> は、“Predelli's solution for vocatives is to categorize them as expressive expressions which are characterized by a specific context bias,”としている。(Predelli: Predelli, S. 'Vocatives.' Analysis. 2008, 68

(2), 97-105.)

また、Dunkling (1990)<sup>5)</sup> は、全ての呼びかけ語は常に、発話時における聞き手に対する話し手の態度を表すとし、呼びかけ語を用いる理由の一つとして、emotionalな要因(話し手は聞き手に対して、自らの態度を示すことを強く望んだり、必要性を感じたりする)を挙げている。

4. 近年目覚ましい発展が見られる歴史語用論では、「発話の周辺(peripheries)」という概念が注目を浴びている。小野寺(編)(2017: iii)<sup>9)</sup>によると、発話の周辺部、すなわち発話のはじめと終わりは、話し手が「語用論的調節をする」場所である。

Detges and Waltereit (2014: 44)<sup>10)</sup> は、左周辺部(発話のはじめ)はメッセージの始まりで、後続する発話を方向付けし(anchor)、右周辺部(発話の終わり)はメッセージの最後をマークする場所で、話し手と聞き手双方にメッセージは明らかになっているので、メッセージに対するコメントをしたり、非常に稀ではあるがメッセージを修正するなど、re-negotiateするのに適した場所であるとする。

また、Haselow (2013: 418)<sup>11)</sup> は、左周辺部は新たな会話における活動を示す新しい談話部分のinitiatorとなる要素がきて、右周辺部は特定の文脈で当該の発話がどのように解釈されるべきかを示す場所であるとする。

5. Kleinknecht (2013)<sup>12)</sup> は、現代Mexican Spanishで多用されるgüeyという語が、呼びかけ語から談話標識へと展開していった現象を論じている。この語は元来、‘stupid’‘idiot’の意味を持つのろい言葉(imprecation)であったが、1990年代に大人の間で連帯意識(solidarity)を示すvocative markerとなり、さらに談話標識になったとする。同様の現象が英語をはじめとした他の言語にも当てはまるかどうかは検討の余地があるが、呼びかけ語と

談話標識の連続性をうかがわせる例だといえる。

## 文献

- 1) 井上逸兵. 「コンテキスト化の資源としての呼称一言語とコミュニケーションの生態学への試論—」『社会言語化学』日本社会言語学会, 2003, 6, 19-28.
- 2) Zwicky, A. M. ‘Hey, Whatsyourname!’ *Chicago Linguistic Society*. 1974, 10, 787-801.
- 3) 滝浦真人. 「社会語用論」. 加藤重広・滝浦真人(編)『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房, 2016, 77-103.
- 4) Biber, D., S. Johanson, G. Leech, et al. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman, 1999.
- 5) Dunkling, L. *A Dictionary of Epithets and Terms of Address*. Routledge, 1990.
- 6) 八木克正. 『英語の文法と語法: 意味論からのアプローチ』研究社, 1999.
- 7) Clayman, S. E. ‘Agency in response: The role of prefatory address terms.’ *Journal of Pragmatics*. 2013, 57, 290-302.
- 8) Sonnenhauser, B., and P. N. A. Hanna. ‘Introduction: Vocative!’ In B. Sonnennhauser and P. N. A. Hanna (eds.) *Vocative!: Addressing between System and Performance*, De Gruyter Mouton, 2013, 1-23.
- 9) 小野寺典子(編). 『発話のはじめと終わり: 語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房, 2017, iii.
- 10) Detges, U., and R. Waltereit. ‘Moi je ne sais vs. Je ne sais pas moi: French Disjoint Pronouns in the Left vs. Right Periphery.’ In K. Beeching and U. Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, Brill, 2014, 24-46.

- 11) Haselow, A. Arguing for a wide conception of grammar: The case of final particles in spoken discourse. *Folia Linguistica*. 2013, 47 (2) , 375-424.
- 12) Kleinknecht, F. Mexican *güey*—from vocative to discourse marker: a case of grammaticalization? In B. Sonnennhauser and P. N. A. Hanna (eds.) *Vocative!: Addressing between System and Performance*, De Gruyter Mouton, 2013, 235-268.

#### 引用作品 ([ ] 内は略号)

Brown, D. *Angels & Demons* 2000

[*Angels*]

Grisham, J. *The Firm* 1991 [*Firm*]

— *The Litigators* 2011 [*Litigators*]

Sheldon, S. *The Sky Is Falling* [*Sky*]

Tyler, A. *The Accidental Tourist* [*Tourist*]